

ものではなく、むしろ著しく黄道帯に密集してゐる。しかし、それでも黄經 150° 乃至 190° あたりの黄道の南北 10° ほゞ(即ちてんびん、さそり、いて、へびつかひの諸星座)は火球の輻射點が少ない。殊にフィッシャー氏の材料では、

毎年十月十四日から同二十五日まで、	ひつじ座 ϵ 星附近、
同 十一月五日から同二十五日まで、	うし座 ϵ 星附近、
同 十二月八日から同十六日まで、	ふたご座 θ 星附近

に多く火球の輻射點が密集してゐる。

此等の事實から考へるに、一般の流星に、火球に、元來、決して根本的に違つたものではないらしい。そして、流星は多く彗星に關係があつたりして、明らかに吾が太陽系内のものなのだから、火球も恐らくは太陽系外のものではあるまいと思はれる。ニスル・ホフマイマターの目錄中に速度が多く双曲線的に現はれてゐるのは觀測上の系統的誤差から來るものらしいといふことである、——何と言つても、流星や火球の輝やく時間を目測するほゞ困難なことはない。之れは將來寫眞術によつて成功しなければならぬ重大問題である。

ちなみに、昨年六月二十九日、奉天で山本氏が撮影した火球は疑ひもなく井ンネケ流星群のものである。今年八月二十七日に關東一帯で見た大火球は、多分はくてう座 ϵ 星附近の輻射點に屬するものらしい。

鹿兒島で觀た火球の懷ひ出

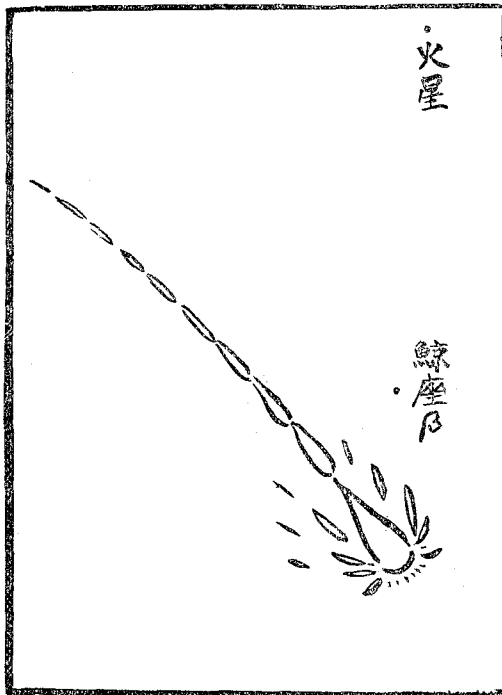
村 上 忠 敬

先頃珍らしい大きな火球が飛んだと云ふことを聞いて、數年前私が鹿兒島市の自分の家で觀察した火球のことを思ひ出した。

それは1924年(大正十三年)十二月十四日のことである。私が庭に出て居たとき突然白い光が地上に木葉の影を投じ、その影が移行して行くので、びつくりして南の空をふりむいた。私の眼に映つたのは圖に示す様な火球

であつた、時間を聞くに、正に午後六時五分であつた。地上に投じた影から察するに、天の北極近く(アンドロメ座)から現はれて殆んど天の経線に沿ふて南下した様である。速さも可成り早かつた。その時は未だ日没後間もない薄明りであつたが、その時の記憶によるに光はたしかに満月をしのぐ程のものであつた。

圖にある様に頭が大きく頭部から火の粉を四散し長い尾を引いてゐた。丁度仰角30度南々東に来て突然消失した。光り初めてから僅に五秒はたつてゐる。その時屋外に居て此の火球を見た人も少ないが、すべての人を驚かしたのは丁度それから五分経つて起つた爆鳴であつた。これが火球の爆破のとき起つたものにして計算するに、丁度鹿兒島灣口附近の頭上になる。従つて高さは約40杆内外であらう因みに此の火球の地面に達したのを見届けた人は誰も居ないし、又落ちた云ふ話をきかないから、爆鳴と共に隕砂になつて散つたものと思はれる。



こゝに掲げた圖は、その時すぐ、忘れない様にスケッチしておいたものを忠實に模寫したものである。火球と一緒にその近くに見えた星はくちら座のべ星と火星位のものだつた。其の美はしかつた火球の光は今尚忘れ難いものである。頭の前面はうすくれないで後の大部分は緑銀色の著しい光を放ち、幾つも連つてゐる尾の部分と頭部から放射する火の粉とは赤かつた。